

白洲次郎著「プリンシプルのない日本」メディア総合研究所 2001年5月17日刊を読む

## カントリージェントルマン

1. (1)一定の教育の課程を通ってきた英国人の英語というものには、一種のアフェクテイションがあつて仲々味のあるものだ。  
(2)アフェクテイションとは「恰好」とでも訳したらいいのかな。  
(3)つまり弁舌爽やかにスラスラ喋る、ということの反対だ。  
(4)ちゃんとした英国人は、非常に<sup>よど</sup>澁みなく喋るような雄弁な人には、反射的に疑惑心をもつ傾向がある。  
(5)シェクスピアのハムレットの淡々とした名調子は評価するが、政治家などの余り演説のうま過ぎる、という人には警戒心をもつようだ。  
(6)普通に話していても、一語一語をさがしている、というような恰好を見せる、それがアフェクテイションということだ。  
(7)だから普通のくだらない日常の会話をしている、一つのセンテンスを終りまでハッキリいわない人が多い。
2. (1)演説は雄弁でなくてはいけないことは英国でも同じだが、その雄弁のあり方が日本あたりと少し違うようだ。  
(2)永井柳太郎式の名演説にはあまりうたれないらしい。  
(3)今、英国で演説が非常にうまいといわれる人の一人はイーデンだが、この人は品よく図々しさのないような演説だ。  
(4)大向うの拍手を強いるようなところがない。
3. (1)このアフェクテイションは、始終雨が降っている暗い、落ちついた英国の気候に由来するところが多いのではないかと思う。  
(2)これが英国人の気質に、ひいては話し振りにも作用しているようだ。
4. (1)そこへいくとアメリカ人には、スラスラと澁みのない演説をする人が多いようだ。  
(2)雄弁家でならしたヒットラーの演説を聞いたことがあるが、意味は大部分わからなかったが、さすがに演説がうまい、ということはわかった。  
(3)しかし英国であんなに興奮してテーブルを叩いて演説したら、英国人は頭がどうかしてやしないか、とか、恥かしくないのか、とか思うに違いない。  
(4)僕も僕なりにそう思ったのだが。



5. (1)この頃、英国を斜陽の国のようにいう人もあるけれども、昔のような大英帝国になることはともかくとして、いわゆる**英国的な人間がいる間は、あの国は崩れない**と思う。
- (2)気分的にも英国は変わったということを**しばしば**屢々聞くが、**英国にいて一番気持の好いのは、身分に関係なくお互いに人間的な尊敬を払うことだ。**
- (3)例えば、前には英国の貴族は田舎に大きな家を構えていて、その領地の中に村が一つ、二つあるのはよくあって、その田舎道を旧城主の子供が歩いている、向こうからその領地内の小作人のおじいさんが歩いてくる、そういう場合の子供が年長者に対する態度は、**実に立派なものだ。**
- (4)**ちゃんと**ミスターづけで、「グッド・モーニング・ミスターだれそれ」とやる。
- (5)片方も丁寧に「グッド・モーニング・ロード」と挨拶する。
- (6)こうした、ほんとうの行儀のよさ、というものが英国人にはあって、**見ていて気持のいいものだ。**



6. (1)この意味で不愉快なのは、日本でなんとか名のある人の家へ行くと、その子供が女中や運転手に威張り散らしていることだ。
- (2)銀行の頭取だの、社長だの、大臣だのの子供が、親父の主宰する所に働いている大人に対する態度も実に言語道断だ。
- (3)これは第一に親が悪いと僕は思う。
- (4)英国では会社の社長に給仕がお茶を持ってきたら、必ず「ありがとう」という。当り前のことだが気持が好い。日本でも子供に親がもっとこういうことを教えなければいけない。
- (5)これがほんとうの**民主教育**というものだ、僕は思う。



P18 ~ 20

<コメント>

終戦後、祖国日本のために大活躍した知識人、白洲次郎氏のエッセイ。「カントリージェントルマン」白洲次郎氏から学ぶことは多い。

2021年2月8日(月)